

大阪の天理教

大阪府（以下「府」を省略）は奈良県（大和）に次いで早く天理教の信仰が伝わった。奈良と隣接し歴史的に結びつきが強い。「天下の台所」と呼ばれた経済の中心地であり、奈良のみならず周辺地域と交流が盛んであった。日常の生活上、奈良の人が大阪におもむき、逆に大阪の人が奈良に出向くことが多い。こうした日常の中に天理教の信仰が伝わり、また伝道の機会も多かったであろう。

現在、大阪には1,616の教会がある（立教175年3月現在）。都道府県別（以下「県（別）」と記す）では最も多い。兵庫と東京も千を超え、第2位、第3位である。この3県はいずれも人口が多い。人の多い所には教会も多い。しかし、天理教が盛んであるか否かを教会数の多寡で単純に判断はできない。人口比、面積比さらには教会本部からの距離などから総合的に見る必要がある。ちなみに大阪は人口比では、10万人あたりの教会が18.23カ所である。全国で14番目、近畿では滋賀に次いで下から2番となっている。

とはいっても大阪は面積の狭い（県別では2番目に狭い）所に1,600を超える教会が存在している。1平方キロメートル強に1カ所の教会がある。山や田畑も含めてだから、市街地ではより教会が密集していることになる。

さて、大阪の伝道について記すべきことは大変多いが紙幅の都合で今回は概略を述べるにとどめる。大阪は江戸期、摂津、河内、和泉に分かれていたが、その内摂津（現大阪市）と河内（現八尾市など）について触れたい。

奈良に隣接している地域は河内である。したがって河内に早く本教が伝わったと考えるのが自然だが、事実摂津が早い。そのことから述べる。

大和川の北岸、紀州街道沿いに安立（現住之江区）という村があり、幕末の慶応期、種市という屋号の種屋夫婦（前田藤助、タツ）が住んでいた。タツがお腹の子を墮胎しようと霊験あらたかな神様を捜し歩いていると、大和庄屋敷の神様の噂を聞いた。行ってみると「家の跡取りだから産むよう」諭され安産したという。お礼に行くと「種を売り歩くように、神様のご守護の話をして歩きなさい」と教祖から諭され、商売をしながら神様の話を説いていた。この種市から勧められ入信したのが三軒家（現大正区）の博多市次郎、藤次郎（義）兄弟と本田（現西区）の井筒梅次郎である。

三軒家は木津川河口の村で農業と北前船などに関係する人たちが住んでいた。明治4年、博多市次郎は藤次郎の耳が不自由なので困っていたところ種市から勧められ、藤次郎と共に教祖の元に帰るご守護頂いた。熱心に信仰、布教するうち、三軒家の人たちや北前船の船主、船頭などが入信した。この三軒家の信仰から現在の西大教会へつながっていく。また、船頭時代にここで入信した土佐卯之助は撫養大教会初代会長になる。

本田の井筒梅次郎は萬綿商を営む商人だった。明治12年、娘の身上の患いで悩んでいた時、隣人の紹介で種市がおたすけに来てくれ娘は回復した。それまでの修験道信仰をやめ、天理教信仰者として道を歩むことになる。井筒は後に芦津大教会を興す。

本田はやがて「本田寄所」と呼ばれ、真明組という講名で遠

隔地伝道の拠点になる。山名大教会、兵神大教会、東大教会、高知大教会は全て真明組から誕生する教会である。三軒家、本田に布教した種市は、その後自ら神様のような振る舞いを始め、やがて本教から離れることになる（『真明芦津の道』）。

大阪市内で早く信仰を始めた一人、船場大教会初代会長になる梅谷四郎兵衛が入信したのは明治14年だった。家業左官職の弟子であった人の親が伝えたというが、その人がどこに住み、誰から聞いたのか不明で伝道経路は分からない。

さて、河内一帯には教祖の噂が広まり、幕末には教祖のもとにお参りに来る人が居た。明治2年には中山秀司の結婚により河内教興寺村の松村家が中山家と親戚関係となった。秀司に嫁した（小東）まつゑの姉さくが松村家へ嫁いでいたからである。しかし、松村家はすぐ信仰を始めたのではなかった。明治4年、さくの身上を教祖により助けられてから信仰に入る。その後は足繁くおぢばに帰り、教祖から教えを受けることになる。

河内には明治6年頃から熱心な信仰者が出はじめ、その人たちを中心にした講ができる。山本利三郎、増井りん、松田利平、林久右衛門などの先人が信仰のリーダーとなって河内の村々に伝播されていく。こうして河内は教祖ご在世時代、すなわち教会制度が確立される前から広範囲に講が群れ立っていた。

明治21年以降、講を母胎として教会へと組織を変えるとき、それまでの講が単独で、もしくは連合して教会になる。高安、中河、大縣、古市、大鳥などの教会がそれである。河内の信仰はさらに大阪市内へ西漸し、西成や南という教会へとつながる。

河内から大阪に伸びた伝道線に天恵組という講があり、そこに泉田藤吉がいた。西国巡礼の強力などをしてしていたが、胃がんを助けられ入信。かしまの・かりもの教理に感動しておたすけに奔走した。

泉田の伝道は猛烈で蒸し芋屋をしながら、病人と聞くと屋台を道ばたに寄せおたすけに走った。泉田から教えを受けた人に、茨木基敬（北大教会初代）、小松駒吉（御津大教会初代）、中西金次郎（大江大教会初代）、寺田半兵衛（網島分教会初代）などがいる。さらにこれらの人たちからにおいがけられ入信した人が多数いることを思えば、泉田の功績は計り知れなく大きい。

大阪の天理教はまだまだ書くべきことがあるが、最後に伝道経路をまとめておきたい。大阪にどこから教えが伝えられたかと言うと、伝道初期においてはそのほとんど全てが奈良からである。当然の話だが伝道史において「どこから伝わったか」は大変重要である。奈良のどこからかと言うと、その多くは直接おやしき、すなわち教祖から助けられ信仰に入った。幕末から明治初期、大和や河内の村には「庄屋敷村の神様」の噂が広まっており、その噂に引きつけられるように教祖のもとにやってきた。その他では敷島大教会の伝道線が岡大教会を経て大阪へ、同じく明和大教会を経て大阪へ伸びている。

以上のような歴史を経て現在大阪には1,600を超える分教会と19カ所の大教会が存在することになった。そしてこれら大阪の教会（布教拠点）を経て日本各地に伸び広がっていく。その主な地域は兵庫、静岡、東京、四国、九州などである。そこからさらに、各地へ伝道されることを考えると大阪の伝道史上の意味はとても大きい。